

ブナ林に棲む生物

三瓶山の原始時代からのブナ林は男三瓶山の北斜面のおよそ 60 ヘクタールに広がっている。この地域のブナは標高最低 700 メートル以上の涼しい気候でのみ見られるが、古くから生息するブナは人間による開発のせいで増々少なくなっている。島根県でも未開発のブナ林はほんの少ししか残っておらず、三瓶の他には南部の県境沿いの山にしかない。

ブナ林の中にはミズナラ、杉、ウリハダカエデ、コハウチワカエデも生育している。クロモジが林床を覆い、初夏にはヤマボウシの白い花が高い木々の梢の下に姿を見せる。秋には、ブナのどんぐりのような形の種は、多くの動物の大切な食料となる。

この雑木林のジオラマの中には三瓶山のブナ林に棲む大型動物が多く含まれている。イノシシやキツネなど、親しみ深いものもある。日本以外ではあまり知られていない、すらりとした体に白っぽいオレンジの毛皮を持つ動物もいる。これはテンで、クロテン（セーブル）に似た雑食性の樹上性哺乳類だ。そのそばにあるやや大きな動物はタヌキで、日本の民話に、いたずらで姿を変える生き物としてよく登場する。テン同様、タヌキは夜行性で日中に出くわすことは滅多にない。切り株の前でしゃがんで足が見えないのは、夜行性の動物アナグマだ。近くに展示されているのは、その爪でウサギを捉える、同じ飛ぶ動物でもずっと恐ろしく珍しいクマタカで、羽根を開いた長さがほぼ 2 メートルにもなる猛禽類だ。クマタカが三瓶山上空を飛んでいる姿がたまに見られる。